時評

「短歌のブーム」の深層にあるもの

田中拓也

「短歌ブーム」が続いている。昨年は『短歌研究』二〇二二年八月号の特集「短歌ブーム」、TBSの「情熱大陸」(二〇二二年十月二日放送)への木下龍也の出演などが話題となった。

また、昨年十月から放送されているNHKの連続テレビ小説「舞いあがれ!」ではヒロインの夫役が「歌人」という設定でストーリーの中で短歌が重要な役割を果たしている。

さらに、同局の「プロフェッショナル 仕事の流儀」(二月二十七日放送)の俵万智への密着取材が反響を呼んだ。こうした中で「クローズアップ現代」(三月十四日放送)は「全国で大流行なぜ?短歌ブームの深層」として、短歌を作り始めた十代から三十代の数人に焦点を当て、その深層を考察していた。

番組の中ではコロナ禍で大学に通うことのできない大学生が短歌を通して他者と交流する活路を見出したエピソードやある男性が転職後の苦しい時期に萩原慎一郎の歌集『滑走路』(角川書店)との出会いを通して短歌を詠む喜びを知ったエピソードなどが丁寧に紹介されていた。そして、短歌ブームの深層にはコロナ禍の中で日々の生活が変容する中で、短歌を通して自らの想いを表現し、その想いを他者と「共有」する喜びを求める人が増加している状況があるのではないかという分析がなされていた。

この分析に首肯しつつ、私が想起したのはかつて結核療養所という閉ざされた空間で短歌を詠む人が多かったという事実である。

個人的な話題になるが、私の亡父は若い頃に結核療養所で長期間療養していた。最近、遺品の整理中に療養所内で発行されたガリ版刷りの新聞を見つけた。その中には入所中の患者たちの随筆や詩歌等が掲載されていた。結核療養所の生活については数多くの文学作品で表現されており、知識としては知っていたが、亡父の療養所での生活を改めて知り、そこでの日々の孤独をひりひりと感じた。

もちろん、かつての結核療養所と現代のコロナ禍の社会状況を単純に比較することはできない。しかし、特殊な状況の中で自身の想いを表現し、その想いを他者と「共有」するツールとなる短歌の力は変わることのない普遍的なものと言えるだろう。

そして、昭和と現代で決定的に異なるのはインターネットの存在である。かつての結核療養所では紙媒体を通して療養者の間で短歌が「共有」されていた。しかし、現代はインターネットの普及により短歌を「共有」する場は紙媒体とは比較のならない極めて大きなものとなった。その中で話題となった短歌が出版され販売部数を増やしていくのはごく自然な現象と言えるだろう。

現在の「短歌ブーム」と呼ばれる現象がいつまで続くかはわからない。だが、短歌の持つ本質的な力は変わらないと思う。